LODE【基本技術解説編】

「なかなか思うように住民が集まってくれない、協力してくれない」と
お感じになっているリーダーの皆様方へ

「もう一工夫を」のご提案です

昨今、自治体が「災害時避難行動要支援者避難計画」の類に取組む事例が増えてきました。このこと自体は喜ばしいことではないかと受け止めておりますが、その内容をみると、大半は"アリバイづくり的な計画（実効性があるかないかはわかりませんが、とりあえず策定しました）"が多く、実際の災害現場において役立つものかどうかは甚だ疑問であると感じています。
現場に不可欠な介護ワーカーや介護物資等も十分にストックされているとはいえません。

それ以前に、「どうやって地域住民や地域在宅の要支援者の方々に参画を要請していくか」、そこで戸惑い、突破できていない自治体も少なくないと思われます。

正直に申し上げて、行政主導では難しいと思われます。

住民主体の防災組織・自治組織（自主防災会や自治会・町内会など）が動くことが不可欠です。

しかし、住民団体で防災学習会や避難訓練等を企画しても、「なかなか思うように住民が集まってくれない、協力してくれない」とお感じになるケースが少なくないと思われます。
そんな時に、是非試していただきたいのが、「個別訪問LODE調査」や「寄せ集めLODEワークショップ（個別調査の集計会）」なのです。

学習会等を企画し、その案内をしても「なかなか出かけられない（体力的・体調的に）」とおっしゃる高齢者が多く、会が低調に終わるという経験は多くの方がなさっていると思いますが、一人一人個別（戸別）に訪問しお話をうかがうことで、「集会に出席できない方でも様々な事情や思いを抱えているんだ」という実態を把握できるケースが多々あります。この「個別訪問LODE調査」を活用していただきたいのです。訪問先の方からは、要支援者に関する情報（訪問先の方だけでなく、その周辺の方の情報等も）や環境や歴史、その他地域の人間関係など、様々なお話を引き出してください。

そして、「個別訪問LODE調査」でストックできた成果を持ち寄り、その情報の全体整理・把握を行う場が「寄せ集めLODEワークショップ（個別調査の集計会）」です。この二段階の調査・ワークショップによって、これまでに見えてこなかった地域の実情がより鮮明かつ具体的に見えてくるものと思われます。

２０２４年元旦に起きた能登地震のその後を見る限り、公共だのみの姿勢では限界を迎えることが明らかだと思われます。自分たちで自分たちを守る自助・互助の道を進むしかありません。

今こそ、ＬＯＤＥをご活用ください。

チームＬＯＤＥでは、各地におけるＬＯＤＥ導入のお手伝いをさせていただきます。
是非お気軽にお問い合わせください。

〒730-0011 広島市中区基町１８―１―１０２４
特定非営利活動法人咲良の会（チームLODE事務局）
理事長　大西 千佳
理事　岩手県立大学総合政策学部教授　倉原 宗孝
電話：082-205-3343　FAX：050-3101-3330
Email：sakura.no.kai.2014@gmail.com　HP：https://sakura-no-kai.jimdofree.com/

この冊子は、２０２３年度日本郵便の年賀寄付金の助成を受けて作成しました。
私たちの活動をご支援くださった、日本郵便株式会社に感謝・御礼申し上げます。

各地の自治会・町内会や自主防災会等の皆様へ
各地の高齢者介護福祉・障がい者福祉関係者の皆様へ
各市区町村社会福祉協議会の皆様へ
各市区町村自治体危機管理部局の皆様へ

LODE（ロード）に取組んでみませんか

超高齢化コミュニティにおける
「防災・見守り・看取りの互助組織づくり」のための
協働・技術移転モデル事業

「防災・見守り・看取りの互助組織づくり」のための

LODE
ロード

【基本技術解説編】

Little people
Old people
Disabled people's
Evacuation

小さき者も
老いたる者も
障害を抱える者も
みんなで避難しよう
みんなで生きて行ける
社会をつくろう

2024年3月
特定非営利活動法人咲良の会
（協力：岩手県立大学総合政策学部倉原研究室）

この冊子は2023年度日本郵便の年賀寄付金助成を受けて作成しました。

I.ＬＯＤＥ（ロード）とはどんな手法でしょう
【ＬＯＤＥの特徴・目標・狙い】

LODE（ロード）は、本冊子表紙にも記したように、「子ども（L）、高齢者（O）障がい者（D）等の避難行動要支援者の支援に重点をおいた、災害時自助・互助力喚起・養成のための手法」です。
平成26年度～29年度、岩手県立大学総合政策学部教授倉原宗孝が研究代表者として、国立研究開発法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター（RISTEX）からの委託を受け、研究開発に取組み開発したものです。
平成29年度には防災白書でも紹介されるところとなっています。

LODEには、次に示すように3つのステップ（段階）と目標があります。

基本編	LODE 1（第1段階）	**目標：住民の互助意識の喚起と、コミュニティの多様性への気づき**	
		1	住民同士がお互いの存在を知る（図上ワークショップ作業で）
		2	住民同士が知り合いになる（ワークショップに参加して）
		3	住民同士がコミュニケーションを深め、相互の理解と互助への意識を高める（ワークショップで会話を重ねて）
		4	要支援者の存在や特徴、コミュニティの住民の多様性について認識・理解を促す（図上ワークショップ作業や研修で）
実践編	LODE 2（第2段階）	**目標：多様性へのさらなる理解を深める（要支援者の方々の困難や不安、困りごと等を知る、学ぶ）**	
		1	要支援者が抱える不安や困難について一歩理解を深める（困りごとチャート図の活用によるワークショップや調査で）
		2	乳児、乳幼児、未就学児、小学生、さらには発達障害の子どもについて理解を深め、必要な支援方法を学ぶ（発達障害の勉強会等を重ねる。発達障害を持つ子どもの親から「困りごと」等を聞き取り調査する。）
		3	要介護・要支援段階、とりわけ認知症高齢者について理解を深め、必要な支援方法を学ぶ（認知症勉強会等を重ねる。家族介護者や施設介護者から実際の現場での困りごとや留意点を聞き取り調査する。）
		4	各種の障がいを持つ方々の特徴について理解を深め、必要な支援方法を学ぶ（障がいに関する勉強会等を重ねる。障がい者の家族から「困りごと」等を聞き取り調査する。）
	LODE 3（第3段階）	**目標：実践支援力を磨く（観察力やコミュニケーション力、対応力等）**	
		1	子どもとのコミュニケーションの実地訓練（避難訓練などで子どもたちと一緒に訓練し、それを重ねる。“上から目線ではなく水平目線”や子どもに拒否されない表情、コミュニケーション力等について学ぶ。）
		2	高齢者介護・支援の実地訓練（初任者研修レベルの介護研修を重ねる。とりわけ移乗、移動支援、食事介助、オムツ交換、陰部洗浄、感染症対策、認知症高齢者とのコミュニケーション力等について学ぶ。）
		3	障がいを持つ方やその家族との実地訓練（避難訓練などで家族と一緒に「1人の障がい者の支援」訓練し、それを重ねる。子ども同様“水平目線”や拒否されない表情、コミュニケーション力等について学ぶ。）

II.ＬＯＤＥ-1　段階にチャレンジしてみよう
【ＬＯＤＥワークショップを企画・準備してみましょう】

1　どんなエリア・枠組みで実施すればいいか

どこでやるか（対象）	目的・狙い
①小学校区や連合自治会	LODEの導入や各団体のつなぎ
②自治会・町内会の単位	基本的なLODE
③マンション・中高層住宅団地	基本的なLODE
④子ども会や学校のクラス・学年	子どもLODE
⑤高齢者施設や障害者施設	状況に合わせたアレンジ必要

LODEワークショップの実施を考える最も基本的な対象コミュニティは、表中②の「単位自治会・単位町内会（連合自治会や連合町内会ではありません）」であると思われます。④や⑤のように、特定の住民層を対象とした取組みも可能です。一方、①のような広いエリアでの実施には、②～⑤の取組みをつなぐ役割が期待されます。

2　ワークショップの規模と会場等

◆図上ワークショップの規模

図上ワークショップの場合、グループ・班別にテーブル（島）を設置し、各島の図面の周りをそれぞれのグループ班員5～10名が囲んで作業することとなります。この人数は、コミュニケーションしやすい人数であると思われます（チームで行うスポーツの場合、1つのチームがバスケットボールの5人、バレーボールの6人、野球の9人、サッカーの11人と、10人程度までが大半です。最大でもラグビーの15人です。10人くらいまでの人数がコミュニケーションを図りやすい規模ではないかと思われます。
島（作業班別テーブル）の数も最大10島程度にとどめたいものです。これは、ワークショップの全体ファシリテーター・コーディネーターが各班の班長（テーブルファシリテーター）とコミュニケーションしやすい規模であると考えられます。
したがって、ワークショップの人的規模は、最大10島程度×各島10人程度＝最大100人程度までが適当な規模であるといえるでしょう。もちろん進行の工夫や会場の設備、あるいは人的な配置によって150人や200人程度の規模までは可能かもしれませんが、それ以上の規模の図上ワークショップは非現実的かもしれません。

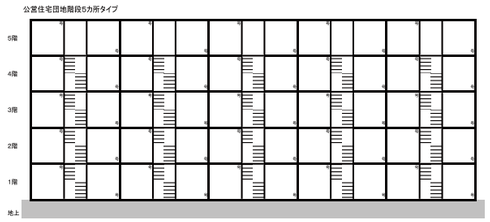
集会施設でのワークショップ（30人規模）の事例

学校体育館でのワークショップ（100人規模）の事例

3　ワークショップで使用する図面等の準備

・対象が戸建住宅が主な地区ならば、コンビニの「住宅地図プリントサービス（有料）」を利用して、対象エリアの住宅地図をプリントアウトして貼り合わせてください。対象がマンションなどの中高層住宅住棟の場合には、エクセルで住棟単位の簡易な戸割の立面模式図を作成してください

貼り合わせて使用する住宅地図の例



地区現況図を拡大して使用するケースも

4　図上ワークショップで使用する凡例表やシール、文具等の準備

・凡例は、地域の特性や必要性に応じて工夫する必要性があります。
・前期高齢者の凡例を設けず、「消費者被害に遭った高齢者」の凡例を設けた地域や、「犬を飼っている家」、「猫のいる家」などの凡例を設けた地域もあります。

・シールは、百円ショップやホームセンターで安価に入手できるものを活用してください。
・・付箋（ポストイット）・・・参加者１人あたり数枚（できれば色も数種類用意）
・模造紙・・・付箋に書いてもらった意見などを貼って整理します
・ラッションペン・・・付箋に意見を書いてもらう時に使います
・カラーマジックペン・・・図上で避難行動シミュレーションなどを行う際の記述用に使います。

5　基本編ワークショップの進め方を考えよう（1回あたり標準2時間）

LODE-1のワークショップの基本的な進め方を次の表に紹介します。

手順			目的や具体的メニュー	主な準備物
第1回目（第2回目も3、4、5は反復します）	❶	導入	●ウォーミングアップ ・挨拶、メンバー紹介、お互いの自己紹介など ●LODEの意味や成り立ちの説明 ●大規模災害発生時における自助や互助に関して考えてもらう、認識を持ってもらう	◆LODEの説明パワポ ◆共助や互助が重要であることを示す説明
	❷	自助や互助の認識を深める	●ポストイットで「あなたが自助としてすることは?」や「あなたにとって災害発生時に必要なこと、ものとは?」等を記入してもらい、全員の回答を整理発表する。 ●東日本大震災時の避難所で高齢者たちが入歯やメガネ等を置き忘れて困っていたことを知らせる。	◆ポストイット（大） ◆ホワイトボード
	❸	要支援者について学ぶ	●多くの住民は要支援者について具体的な知識が少ない。子ども、高齢者、障害者等に関して説明する。（リーダー層にはヘルパー初任者研修程度知識を目指して欲しい） ●要支援者についての説明と併せて、図上作業で要支援者等の情報に対応するシールの種別を説明する。	◆要支援者に関するパワーポイントなどでの説明資料 ◆凡例表
	❹	図上作業（情報可視化）	●地図やマンションの戸割立面図の上に該当する要支援者等情報のシールを貼っていく。 （班別作業が効率的：1班は～10名程度） ●他の班との情報交換による補強タイム（お助けタイム） ●コミュニティ全体の状況を全員で共有するため、班別に種別毎シール数を発表、その後全体で集計してみる。	◆凡例表 ◆各種シール ◆図面 ◆ホワイトボード
	❺	図上作業後半（避難想定訓練）	●仮想災害発生の与件を発表する。（災害の種別、場所、規模・程度、日時、気象条件。津波の場合は到達予想時刻と想定規模。火災の場合は場所や規模、現在の状況） ●与件のもとで、どのように班員が避難するか、あるいは避難支援（要支援者等）するかを検討し、全員で共有するため、班のまとめを全体に向けて発表する。	◆4で作成した図面 ◆その上にかぶせるビニールシート ◆マジックペン
第2回目	❻	自分や家族の不安・困難の洗いだし作業	●「困りごとチャート図」の分類を参考に、自分や家族の困りごとを洗い出して、チャート図上に整理してみる（ポストイットに何枚でも書き込んで、チャート図上の当てはまる位置に貼り込んで整理します）。 ●テーブルのグループメンバー同士、会場の参加者同士で困りごと情報を発表し合います。 ●チャート図上に貼りこまれた参加者全員の意見をもとに、「避難所の不足を補うために必要な物品やマンパワー、システム」を整理する。	◆困りごと整理・分類チャート図 ◆ポストイット（大）
	❼	要支援者避難支援計画検討	●作成した図中の要支援者を「どのように避難させるか、そのために必要な対応方法や人員は?」について、避難行動支援、避難生活支援の両面から検討してまとめ、全体発表する。	◆避難行動支援計画シート ◆避難生活支援計画シート

❶導入部分

①【受付、着席】
・最初に飲み物や軽食を用意しておくことも有効です。飲食には、緊張がほぐれ会話が進みやすいという効果が期待できます。
②【挨拶・導入、進め方の説明:5分～10分】
・お世話役（全体ファシリテーター、補佐役、テーブルファシリテーター（各テーブルのリードをしてもらいます）、さらには社協や行政からの協力者などを全体の場で紹介してください。
・全体ファシリテータは、テーブル上にある図面、シール、凡例表、ポストイット、筆記具などが揃っているか、各テーブル参加者に呼びかけ確認してください。
③【自助・共助・互助について考えてもらう:2～5分】
・なぜ自助が、互助・共助が重要かを全体ファシリテーターから説明します。
・阪神大震災時、救出された人の大半が、自助・共助・互助によるもので、公助によって救出された人は非常に少数であったことを説明します。
④【LODEの紹介と意味の説明:2分～5分】
・全体ファシリテーターから次の項目を簡潔に説明してください。
・大災害時犠牲になりやすいのは子ども、高齢者、障害者などの避難行動要支援者。
・LODEは、地域コミュニティの自助力・互助力の強化を目指す手法。
・要支援者を含め住民同士がよく知り合い、理解し合うことを目指す。
・LODEは、要支援者が抱える困難への理解を深めることも目指す。
・これらによって、防災に対してだけでなく、平時の見守りにも役立つ。

❷自助・互助への認識を深めるための作業

【ポストイット作業:避難場所のマークは?:10分程度】
◆全体ファシリテーターが、参加者全員に次のような作業指示を出します。
・一人1枚ずつ、□色のポストイットを手にしてください。
・全国共通の「避難場所のマーク」をポストイットに描いてください。
・避難場所は、急な発災からとりあえず命を守るための場所です。災害は自分の街にいる時にやってくるとは限りません。知らないよその街ではこのマークを見つけるのです。子どもたちにも教えてあげる必要があります。
・各テーブルのリーダーは班員のポストイット回答を集めて前のホワイトボードのところまで持ってきてください。補助者の方は、集まってきたポストイットの中から正解、或いは正解に近いものを選んでください。
◆この後、参加者に正解を示します。

作業2:「避難場所マーク」の正解

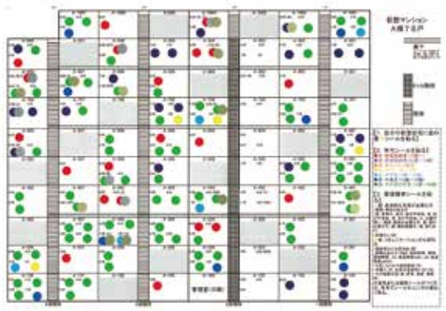
❸避難行動要支援者への理解を深めるための学習

要援護者に対する理解を促すことがLODEワークショップでは重要な目的の一つです。住民の中に、認知症に対する初歩的・基本的理解や、各種障がいの特徴に関する初歩的・基本的な理解が進んでいけば、そのコミュニティは日常時から“見守り力のある福祉コミュニティ”へと育つはずです。
①【学習その1:子どもについて:5分程度】
◆ファシリテーターによる説明が難しい場合は、子ども、特に幼児や小学生に詳しい方に説明をお願いします。特別支援コーディネーターでもある幼稚園教員や小学校教員、或いは療育施設の職員などにお願いするのが適当だと思われます。次のようなポイントをわかりやすく説明してもらいます。
・基本的に乳児、幼児と発達障害などを持つ児童は要支援度が高い。
・中高学年であっても、昔の子どもより自助力が低くなっているとも考えられる。岩手県立大学倉原研究室が兵庫県伊丹市で調査した結果によると、中高学年のうち、自宅の住所や電話番号を完全に記憶している子どもは全体の3割に満たなかったということである。
②【学習その2:在宅の高齢者について:5分程度】
◆ファシリテーターによる説明が難しい場合は、高齢者、特に介護や認知症等に詳しい方に説明をお願いします。社会福祉士や介護福祉士、老人ホームの職員などにお願いするのが適当だと思われます。次のようなポイントをわかりやすく説明してもらいます。
・介護保険制度で要介護・要支援に認定されている方だけでなく、“予備軍”と疑われる方々に注意・配慮しなければならない。外出する回数が減って閉じこもりがちになった、急に痩せてきた、お茶を飲むとむせる、杖や手すりがないと歩けない、消費者被害に遭った、オレオレ詐欺に遭った。これらは要注意サイン。
・認知症による問題行動のいくつかは、周りの人々の避難所生活を崩壊させかねないものである（物盗られ妄想や弄便など）。対応策を講じておく必要がある。
③【学習その3:障害を持つ方について:5～10分程度】
◆ファシリテーターよる説明が難しい場合は、療育施設や障害者施設の職員などにお願いするのが適当だと思われます。次のようなポイントをわかりやすく説明してもらいます。
・障害は身体障害、知的障害、精神障害に大別される。また発達障害はその症状によって知的障害や精神障害に含まれる。
・一般住民の大半は、「障害者」と聞くと、身体障害者をイメージするようだ。意思確認やコミュニケーションの支援が求められる知的障害者や精神障害者のことは、忘れられがちである。
・詳細な障害の分類・特徴を理解するまでには時間を要するため、LODEでは「身体的なサポートが必要な方」と「意思確認やコミュニケーションの支援が必要な方」の2つに大別してワークショップを行う。
・障害ではないものの、障害者と同じような配慮や支援を必要とする方々が存在する。難病患者や強度の食物アレルギーを持つ方々、外国人、等である。
・虐待関係にある家族（虐待するものと虐待されるもの）も災害発生時に避難面での不安を抱えていると思われる。虐待の発覚を恐れ、他の住民たちが避難している避難所へ来ない、来づらいという場合を想定しておかなければならない

❹図上作業･･･住民情報、要支援者情報の可視化

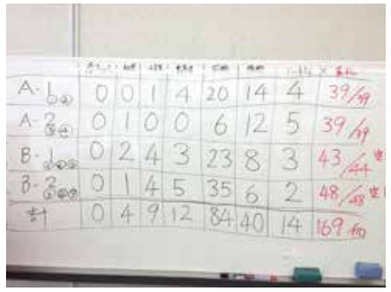
①【図上作業その1:住民情報、
要支援者情報のシール貼り:20分程度】
・要支援者に対する認識・理解を深めたのち、凡例表に従って、コミュニティの住民たちの情報をシールで可視化していきます。
・シール貼りの作業は、班の全員で協力しながら行います。この時、ただシールを黙々と貼るのでは意味が半減します。「あそこのおばあちゃん、最近見ないけど具合悪いの？」、「おばあちゃん、要支援になってデイに通っているから最近地区の会合に顔を見せなくなっているのよ」、「あそこのご主人は退院されたらしいけどまだ療養中で歩くのが辛いらしいわ」というような自然な情報交換が住民間で行われ、それを共有し始めること、それが重要なのです。
・また「お助けタイム」と称して、異なる班と班が情報交換する時間を確保します。

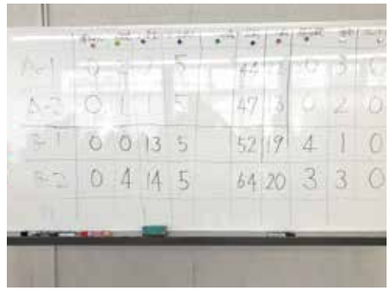
一般の地区でもマンションでも、班作業ではお喋りしながら、住民情報を出し合います。



マンションの住民情報図が
完成です。これを毎年作成すると、段々と情報が
増えていきます。

②【図上作業その2:年代別等住民情報数のカウント作業:10分程度】
・各班の作業結果を合計して、住民情報数の一覧表を作成します。
・年代別および「要支援」の種別毎に、各班の人数を発表し、ホワイトボード上の表に書き込んでいきます。
・この数字は、「ここの参加者でどの程度の住民の情報数を持っているのか」の目安になります。



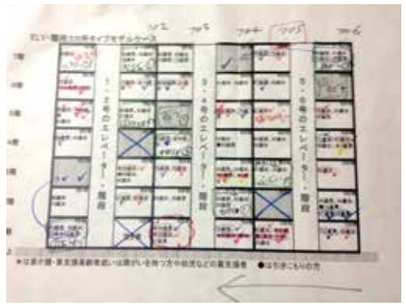


あるマンションでは、毎年LODEワークショップを開催し、集計表の住民情報数がどれだけ増えているかを確認し、互助力強化の尺度としている。

❺図上作業後半･･･避難想定訓練

③【図上作業その3:図上での避難シミュレーション:10分程度】
◆住民情報、要支援者情報の可視化作業が終わったら、次はその図面の上で、図上避難シミュレーションを行います。全体ファシリテーターから、次のように「与件」が発表されます。
・2021年○月○日夜○時、□□□を震源とするマグニチュード9.0の大地震が発生、ここの街でも震度6強を記録
・「･････」が倒壊、「････橋」が崩落、「･････」から火災発生。北の風5メートル。
・大津波警報が発令、津波の到達予想は1時間後。
◆こうした与件に基づき、参加者には頭上で、どのような避難行動をとるか、マジックで線表示してもらいます。その上で、班員相互或い他班と評価しあいます。
・火災や倒壊家屋を回避して避難場所へ逃げることができたか。
・近くの要支援者の避難に協力できたか。
・津波が到達するまでに避難することができたか。
◆避難シミュレーションの結果は、発災時刻や風向・風速などの与件が変わるだけで、全く異なるものになります。過去の災害からも学び、いくつかのタイプの与件で何度も実施してみることが重要です。

班の中で避難ルートについて意見を交換する。
各人が異なる意見を持つ場合も、そのことを認識するいい機会となる。



マンションで、誰がどの要支援者を支援して逃げるかの検討を行った図

小学生が各自宅から避難所までの道のりを図示した。
小学生に地図を読ませることは大切である。

❻「避難時の困りごと」は？･･･要支援者支援への視点を学んでもらう

下記のチャート図は、一般住民に向けたLODEワークショップにおいて、参加者が様々な気づきを得て、自分の考えを整理しやすいようにと、考案されたものです。
このチャートは、曼荼羅構造を利用しています。箇条書きで見るよりは、他の項目の存在や項目間の関係などに自然と意識が向けられるのではないでしょうか。
例えば、次のように利用します。
参加者は各自が「自分の不安・困りごと」をポストイットに記し（1事象1枚）、大判の模造紙に印刷されたチャート図の該当する部分に貼っていきます。
参加者全員分（または班員全員分）の模造紙に貼られたポストイット内容を、カテゴリー別に分類・整理します。
それらをまとめると、「これまでの避難所には明らかに不足しているもの（物品だけでなくシステムやマンパワー、居住環境なども）」が見えてくるはずです。
それらを「個人が準備するもの」、「コミュニティで準備するもの」、「行政にお願いするもの」に分けて再整理することで、従来型の避難所運営ゲームでは出てこなかった避難所充実案の発想等が期待できます。
日本の従来型避難所の多くは「スフィア基準（国際基準）」から相当劣っていると言われます。こうした取組みから避難所の質の改善につなげていくことも有意義な取組みだといえます。

❼ 避難行動要支援者の支援計画検討（班作業）

コミュニティの中にお住いの要支援者一人一人に対する支援方法を検討します。
避難行動要支援者支援計画の中の「個別計画」の骨格を作成していくための検討例です。
次の表は、その最初の段階の検討で概括整理したものですが、参加者の“福祉人材としてのレベル”が上がってくるにしたがって、より詳細な検討もできるようになります。

①【避難行動支援計画の検討：10～20分程度】

◆次の事例のように、コミュニティの中の要支援と思しき方を、発災時に避難支援する方法を検討します。

マンションでの避難行動支援計画検討事例　（発災の想定【災害の内容：震度６強の地震。物資の確保等の面から避難所に向かう。】）

住戸 No	要援護のタイプ	避難の想定	必要になるサポートの内容	必要となるサポーターの人数	サポーターとなれる人は？
602	意思疎通が不自由（ダウン症）	・垂直避難（下の階） ・外部への避難（避難所）	コミュニケーションをとりながら避難してもらうためのサポートが必要。	2～３人	家族と 701 の N さん（コミュニケーションが取れる）
803	身体の不自由（心臓にペースメーカー）	・垂直避難（下の階） ・外部への避難（避難所）	ペースメーカーが正常に作動していれば大きな問題はないが、誰かが注意してあげた方がいい。	1～２人	仲が良くて鍵も預かっている別棟の K さん
1007	意思疎通が不自由（外国人）	・垂直避難（下の階）と外部への避難（避難所）	避難所へ避難することの説明をしてあげる必要。 場合によっては避難所まで同行避難してあげる必要。	1 人	105、106、207、305 など（普段からのコミュニケーションが必要）
606	身体の不自由（車椅子）	・自宅避難がベター ・または垂直避難（下の階）と外部への避難（避難所）	万一自宅避難ですまない時には、避難所等へ避難が必要になる。 １階まで車椅子で降ろすことが必要。	4～6 人	206、506、607、307
810	身体の不自由（足が不自由） 意思疎通が不自由（認知症） ※要介護認定を受けており、デイサービスへ通っている。	認知症のため、自宅避難が好ましい。外部避難は家族が一緒でないと難しい。	・歩行困難のため、担架が必要。 ・一般の避難所では認知症進行が懸念されるため、可能な限り介護施設などへの避難を考える。	4 人	・上下階の住人（710、910）など

②【避難生活支援計画の検討：10～20分程度】

◆次の事例のように、コミュニティの中の要支援と思しき方が、発災時に避難生活を送る上で必要な支援方法を検討します。

避難生活支援計画シート事例　（発災の想定【災害の内容と復旧までの想定期間：大震災のため長期間の自宅外避難が必要】）

住戸 No	要援護のタイプ	避難の想定	必要になるサポートの内容	必要となるサポーターの人数	サポーターとなれる人は？
１丁目１－２０―１０３号	意思疎通が不自由 （発達障害：自閉症）	・一時的には中学校へ避難（体育館でなく教室など希望） ・その後専門施設へ移動希望	・人が大勢いるところ、初めていく場所ではパニックを起こすことがある。静かで小さな空間を求めたい。 ・極端な偏食で、コーラとマカロニしか食べない。火を含め常に準備必要。	家族に加えて本人が拒絶しない人	家族に加えて 203 の奥さん
１丁目１８－２―２０１号	意思疎通が不自由（発達障害：注意欠陥多動障害）	・一時的には中学校へ避難（他の避難住民に迷惑をかける可能性）	・じっとしていられない。放っておくと走り回るので、他の避難住民の方からクレームが出る。 ・常に体を動かせて、適度な疲労感を与える工夫が必要。あるいは作業を与えるなどの工夫も必要。	家族だけでは疲れるので、症状に理解のある人が数人	コミュニティの住人たちに発達障害についての研修講座を開き、人材を育成する必要。